

## 献 辞

社会学部長 滝澤武人

小川登教授は、本年3月末日をもって定年を迎えられ、本学を退職されることになりました。多年にわたる先生のご功績とご貢献に報いるため、桃山学院大学から「名誉教授」の称号をお贈りすることがすでに決定されております。さらに、この『社会学論集』を「小川登教授退任記念号」として献呈することにいたしました。

先生は、京都大学大学院博士課程を修了し、1969年4月に本学に就任されました。その後37年間、大学および社会学部の発展のために、文字通り献身的に尽力してこられました。教育・研究はもちろんのこと、社会学部長として2年、常務理事として7年7カ月などの要職を歴任されておられます。

先生のご専門は一貫して「労働経済論」にあり、1974年に京都大学経済学部から経済学博士号を授与されました。その審査対象となった御著書『労働経済論の基本問題』（ミネルヴァ書房、1973年）は、労働経済論という若い学問の理論的体系化を目指した野心的試みとして高く評価されております。その序章は次のように書きはじめられています。「いかなる学問も根源的には、人間にとって許すことのできない問題・矛盾がおこり、それが解決されねばならない切実さをもって人間存在にせまってきたときに生まれるものである。」

このお言葉には、学問研究に対する先生の熱い思いがこめられており、労働の現場から理論と実践を統一しようとする誠実な姿勢が見いだされます。大学教員組合の委員長や書記長として活躍されたのも、このような自らの思

いや姿勢に由来していたのでしょう。私が組合活動を御一緒させていただいた折には、どんなに多忙であっても常に研鑽を積み重ね、論文や著書を纏める準備を怠ってはならない、と先生から諭されておりました。

先生はとても教育熱心でした。それは小川ゼミの個性的で充実した『卒業記念論文集』を一読すればすぐに分かることです。また、休み時間に前もって教室に行き板書をすませ、チャイムと同時に授業を開始するという気合いの入れようでした。先生は学生諸君を深く愛し厳しく教育されていたのです。学生もまた先生を敬愛しておりました。

先生を大学からお送りしなければならないことは、たいへん残念で寂しいかぎりです。われわれ後進に対して引きつづきご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。先生におかれましては、なにとぞご自愛の上、ご平安のうちにお過ごしくださいますよう心よりお祈りさせていただきます。

(小川さん、有り難うございました！)

2006年2月